

成長のエンジンとしての都市

—CELへの期待—

橋爪 紳也

Written by
Shinya Hashizume

都市 成長のエンジン

二〇世紀は「都市化の時代」であった。対して二一世紀は「都市の時代」である。私たちは今、少子高齢社会や人口減少社会の到来、生活の成熟化といった要因を前提に議論をしている。しかし地球規模で見れば、人類はこれまでにない、経験したことがない爆発的な人口増加のさなかにある。二〇〇〇年に六一億人であった世界の人口が、三〇年後には八二億人になるという予測がある。

一九九六年、国連のハピタット2・イスタンブール宣言では、都市こそが「成長のエンジン」と強調した。今後、増加する人口のうち、かなりの割合が都市に住むというのだ。また二〇一〇年の開催に向けて準備がすすめられている上海での万国博覧会では、「都市」が大きな主題となっている。かつて都市は解決すべき問題が山積する場所であった。しかしこれからは状況が違おう。エネルギー問題、地球環境問題、食料問題などにも目を配れば、都市という「人が集まって暮らすかたち」をいかにリ・デザインするのにかに、人類の将来がかかっているといっても過言ではない。

私たちがなすべきことは、当面の都市問題を解決するということだけではない。文明的観点にたてば、世界の諸都市、とりわけアジア諸都市の模範となり、憧れの対象となる「持続可能な都市」を実現することに努力を傾けるべきではない。

いか。関西の諸都市は、西欧が呈示してきた近代システムの影響を受けつつ、自文化との融合のもとに独自の発展を遂げた。私たちが暮らす都市を、日本文明のきわめて個性的な所産として誇りに思い、経済と文化の善き関係と良き循環を内在させる、日本流の「持続可能な都市モデル」として世界に呈示する使命がある。

都市ブランドと関西

そのためにも、都市に固有の魅力を磨きあげ、地域の格を高める実践が欠かせない。その方法論として、都市格の向上による都市のブランディングが重要だろう。

二〇〇六年、日本にあって内外からの注目を集めた地方都市として福岡を指摘することができている。『ニューズウィーク』の国際版において「世界で最も躍動感のある一〇の都市」のひとつに、韓国の高陽市などとともに選定されたのだ。

選定の基準として、情報化の度合いや居住魅力、交通や空港などの利便性などが指摘されていた。しかし福岡の場合、なによりも「アジアへの玄関口」を目指す姿勢が高く評価されていた。敗れたとはいえ、五輪招致運動を展開した意欲が買われたのだという見方もできる。また、新規の工場進出があいつぐ「シリコンアイルランド九州」の首都という形容も目にした。この一〇年ほどで福岡は、都市ブ

ランドの構築にすぐれて成功したといえるだろう。

ニューヨークやロンドン、パリや東京など、金融や経済の中核機能を有する「世界都市」だけが、二一世紀の都市文明を牽引するわけではない。ドバイや上海のような圏域の中核となる大都市も魅力的だ。加えて、適正規模であることを前提に、交通の利便性や情報通信の充実など暮らしやすさの指標が高い、福岡のような都市が秘めている可能性に着目する専門家も少なくない。横浜や金沢のように創造的な市民の営為を集積し、「創造都市」を目指す点に活路を見いだす都市もある。

もつとも、七〇年代、八〇年代に遡って、先の指標で都市を評価するのならば、たとえば神戸市などが日本を代表する「躍動感のある都市」に選ばれたのではないか。「株式会社神戸市」とも呼ばれるほどに都市経営を実践、暮らしやすいうえに、なおかつ観光地としても魅力的な都市を形作った。同時に「アーバンリゾート都市」というブランドも確立した。しかしあの震災によって、華やかな都市像はもろくも崩れ去った。十二年におよぶ復興の努力を重ねて、今、神戸は先端医療やファッションの領域に突出した新たな自画像を描き直そうと試みている。しかしかつてのブランド力を回復したとは思えない。

神戸だけではない。大阪ひいては関西という地域の、国内さらには東アジア圏域における求心力の低下は指摘されて久しい。実質経済や文化力の向上も重要だが、都市間競争を勝ち抜くためには、実態に添加された「付加価値」の所産である地域ブランドを高める実践が不可欠である。私たちはさまざまな機能が集積しているという都市の本質的な魅力があるからこそ、才能がある人や新規の投資が関西に集まってくることを、これまで以上に自覚するべきではないか。

CELLに期待するもの

都市に関わる領域にあっても、さまざまな提言と実践を重ねてきた大阪ガスエネルギー・文化研究所の活動に、さらに期待するところは大きい。とりわけ文化と経済とに架橋する営為を重くみて、さらなる施策提言を重ねて欲しい。たとえばコミュニティとツーリズムの関係、文化政策と創造力をめぐる挑戦的な試

みなど、魅力的な課題と実践を列記することができる。

都市を「集まって暮らすかたち」と仮に定義するならば、住宅群、職場、商業施設など、個別の施設群がそれぞれに存在し、その総和として考えるだけでは十分ではない。多様な機能が集積しつつ、相互に関係性を持っているがゆえに、都市独自のコミュニティが育まれ、結果として都市は都市たりえている。

実際、コミュニティのありようからも都市の変化を感じ取ることができる。近年、わが国では、「新しい公共性」をめぐる議論もさかんである。従来のように官と民との区分から「公」を語るのではなく、都市を自在に活用する市民やコミュニティ、あるいは企業の活動とともに「新しい公共」が見いだされるといふ発想が必要だというのだ。日本社会におけるかつてのシヴィック・リベリズムの伝統を回復させる契機になるかも知れない。

都市とは、個の活動を集合の力へと転じる「公共の場」という定義ができるだろう。企業経営にあつて、組織に所属する多彩な人材の可能性を活用するべくダイバシティ^(※)の発想が重視されているように、創造的な都市の指標のひとつとして、「寛容性」の重要性が指摘されることがある。どれほど多くの人を受け入れる容量を持っているのか。多彩なコミュニティを産みだす土壌があるのか。歴史都市群を基礎とする関西の真価が問われるところだろう。

() ダイバシティは多様性の意。ダイバシティ・マネジメントは、さまざまな切り口から個人の良さを再発見し、その多様性を組織のパフォーマンス向上に活かしていく経営手法のこと。

橋爪 紳也 (はしづめ しんや)

大阪市立大学都市研究プラザ教授、工学博士。一九六〇年大阪生まれ。八四年京都大学工学部建築学科卒業。八六年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。九〇年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。京都精華大学人文学部勤務などを経て現職。著書は、『大阪新・長屋暮らしのすすめ』(創元社)、『飛田百番 遊郭の残照』(創元社)、『飛行機と想像力 翼へのパッション』(青土社)、『万国びつくり博覧会』(大和書房)、『面白につぼん電化史』(電気新聞社)など。